

も見ました。

離れ座敷で数日過ごしたある日、農作業小屋に移りました。箸一本、茶碗一個もない、無からの生活が始まりました。しかし母には希望がありました。それは兄の帰還です。娘五人の中の一人息子であった兄は医学生で、学徒出陣をしていました。兄さんが帰って来ればと私達は待ちました。

でもそれは一枚の紙で全ての夢も希望も失う日がきたのです。そこには「陸軍軍医大尉蜂屋富男グアム島で玉碎」と記されておりました。母の嘆きは大きく、寝込む日が続きましたが、食べねばなりません。

樺太に残してきた父の生死もわからず、不安な日々でしたが、母は強かったです。農家の手助けなどをし、どうにか空腹をいやす日々が続きました。

役場から生活保護を受けたらと、すすめられました。母は貧しくてもお国から施しを受けるのは辞退したいと話していました。そうすることは母の自尊心が許さなかつたのでしよう。

あの時代、人びとは一様に空腹でした。でも引揚者

にはさらに生活のすべてがないのです。職も住まいも物々交換するものもない。本当に惨めでつらい日々だったのです。でもそのうち父も帰還し、世の中も落ち着いてくると共に、どうにか人並みらしい生活ができるようになりました。

両親の苦勞と努力で、我が家には戦後の復興がどこよりも早く訪れたのではないかと、今思い出しております。そんな暗いつらい時代を経てきた最後の世代の私達だからこそ、声を大にして、これからの人達に伝えていきたいのです。

現在の平和がどれだけ多くの人々の尊い犠牲のうえに立っていることかということ。

七人の子供を連れた私の恩人は今
どこに！

北海道 小柳 ヒフミ

一匹のトンボが細い棒の先に止っている。長く垂れ

下った萩の枝に花が一ぱい咲きほこって、山鳩の声しきり、平和そのもの。

ここは札幌の郊外、藤野、早いもので今日は四十六年目の終戦の日、あの日樺太は今日のように暑い日であつた。

當時を思い出し、あの地獄の逃避行を忘れることはできない。

夫は昭和二十年四月、三十八歳で召集、子供が十七歳を頭に七人、その上私は五か月の身重であつた。

八月に入って戦況は一日々と不利になり、空襲を告げるサイレンがしきりに鳴り渡る。その都度、年子五、四、三歳の子供に仕度をさせて、ぞろ／＼と私はその誘導するのに必死の思いであつた。

戦況は更に厳しくなり避難命令が出て、隣組と一緒に避難しなければならず、臨月の体で家を離れることを私はためらつた。

八月七日早朝夫が夢の中で私の名前を呼ぶ声に目を覚まし、それから陣痛が始まり、女兒を分娩した。五日目には隣組の方が、せき立てるように、荷馬車に乗

せて三里（十二キロ）の山の中に避難した。

落ち着く暇もなく赤ん坊は、お乳を飲む力もなく、そのまま八月十四日亡くなつてしまつた。

翌十五日十二時終戦の詔勅に皆んな声を出して泣いた。戦争はついに負けたのだ。

私は産後の血が逆上し、目先が真暗、真夏の空は蒸し返すような暑さで暮れてゆく。茫然としている私に長女は早く帰宅しようと言う。七人の子供をかかえ、考える力もなく涙もでない。

長男を探したが見当らない。三歳児には小さなリュックに貴重品を入れて背負わせ、子供皆に適当に荷物を持たせ、産後の私は一歳七か月児を背負うのがやつとのこと。暗くなつた山道を歩き始めた。細い山道は人と人がぶつかり合い、暗くて足下が危ない。肉親を呼び合う声しきり。貴重品を背負つた四男が泣き出して歩こうともしない。私にしがみついて泣く声は哀れにも山彦となつて響いた。

その時一台の自転車が通り過ぎ間もなく引返して、泣く子に乗せて上げると言う。大変助かつたと思ひお

願ひした。

その方は主人の知合いでしたが、その時私はとんでもないことを言つてしまった。

このリュックには大事な物を入れてあるのだから、と子供に念を押して言つたことが仇となつて間もなく家に着いた時、待つていた子供の背にリュックが無い。あのおじさんが坊や重いから持つて上げると言つてそのまま自転車で帰つたとのこと。

私の体は血が逆流したように暫くは伏せつたまま、やがて落ち着き自転車の宅を尋ねたがすでに一家の姿はなく、まもなく長男が帰宅したが怒る気力もなく、只この子がいればこんなことにはと……八月十八日、十三年間住んだ内路を後に大泊に来て倉庫に一夜を明かす。主人の姉の夫が残つていて、私達にも福島に行くように言われたが貴重品を取られた私は迷つたが行くあてもないので行く決心をして大泊港に向かった。私は小さい子供が離れないように紐で結び波止場で船を待つた。そんな時留萌沖では潜水艦の攻撃で引揚船が沈没したとの悲報、とても私は日本へ帰れるとは

考えられない。

その時三メートルくらい先で一人の憲兵が何やら指示をしているのが見えた。

私の目には軍服姿の年令も同じくらいの主人に写つたのでしょうか、突然小走りに憲兵の前に行った。上の子は不思議に思つたと言う。私は何を話したかは覚えていないが、唯一言「奥さん敗戦の苦しみは大変なことですしつかりして下さい」と叱られたような覚えがある。

その時一台のトラックが通つた。憲兵は号笛を鳴らして止め、私達を呼び満載した麦粉の上に放り投げるようにして乗せられたまま暫く走り海岸線に出て発動機の出港する寸前に乗せられた。

私達のために荷物を降ろされた人の不満を言われた言葉は今でも忘れずに覚えている。

稚内に向う途中、豊原が爆撃されてもうくと火煙が立ち上がるのを船の中から見ながら稚内に上陸、福島の実家へ、父母はすでに亡くなり、着のみ着のままの七人を連れての初対面、誰一人として笑顔で迎

えた人はおりませんでした。

私達は八人物置小屋の四畳に重なるように寝起した。貴重品を取られた私達は血の苦しみ、働くところも今のようになく四男は栄養失調で倒れ、引揚者のいない福島では配給は殆どありません。

田舎廻りをして和裁をしたり僅かな収入を米に替え、お粥に塩の生活を九か月、無一文で引揚げた惨めさ、只一冊帯の間に農業会の通帳を手続きをしたが九月末で締め切られそれもだめだと云う。

毎日通る帰還兵を主人ではないかと、今日も落胆する毎日でした。どこまで不運が続くのだろうか。

四男尼はついに二十一年五月死亡した。その頃北海道の友人からお互いに召集の身で苦しむならと言われ、北海道へ私は旭川の駅で倒れ駅長さんの暖かい心づかいで二晩泊めていただき回復し、オホーツク海の浜頓別に到着、青い海、磯の香り、瞬間私は生き返ったように生気が戻ってきた。

子供の位牌をしつかり抱いて、この青い海広々とした平野を一目でも見せてやりたかったと思う長いく

苦難の道のりでした。

半農半漁の村ではあるが海の人も農家の人も優しい人達ばかりで嬉しかった。

私は今でもあの群衆の中から私達だけを救って下さった、あの方は誰だったのか、それは主人の化身だったのかしらと不思議に思うのです。あの時の憲兵さんの名前も聞かず全く残念に思っています。

あの憲兵さん、健在で日本のどこかへおいでになりましたら、お礼を申し上げたいと念じております。

召集された主人は二十一年六月戦死。今年は四十六年目のお盆です。墓標に刻み込まれた三人の名、香炉からたなびく香の煙、どこからか読経の声が風と共に流れてくる。

つらい過去の道を両手を合せながら振り返るのでした。